

平成6年度健康管理室来室体育学部学生について

The Healthy and Medical Conditions of
the College Athletes in 1994

内藤 祐子*, 青木 由紀**, 飯島 まゆみ**, 田中 利枝**,
吉澤 由起子**, 峯岸 由紀子***, 松本 高明****

Yuko NAITO *, Yuki AOKI **, Mayumi IIJIMA **, Rie TANAKA **,
Yukiko YOSHIZAWA **, Yukiko MINEGISHI *** and Takaaki MATSUMOTO ****

はじめに

体育学部の授業は実技・実習の授業が多いうえ、大多数の学生がクラブ活動に所属してスポーツ活動をおこなっている。したがって、体育学部学生は他学部比べて運動負荷による傷病発生のリスクが高く、外傷および内科的疾患がきわめて発生しやすい状況にある。しかも寮や下宿生活をしている学生も多く、どうしても健康管理がおろそかになりやすい。そこで今回、平成6年度の健康管理室の来室者記録をもとにして体育学部学生の傷病について分析したので報告する。

対象および方法

平成6年4月1日から平成7年3月31日までの間に健康管理室を利用したのべ利用者総数は2814名であり、そのうち健康診断書申請者等が768名、患者として来室したのべ人数は2046名であった。この人数から教職員と校医による予約診療を受診した学生数の分を除外した患者総数は1475名だった。患者総数の内訳は体育学部学生は1452名、他学部学生は23名であった。なお、傷病状態は主に問診および視診によって分類した。

結果

(1) 男女別・学年別の傷病発生状況

体育学部学生の患者総数1452名の内訳は男子1189名、女子263名であった(表1)。件数だけをみると圧倒的に男子学生の方が多いが、在籍学生の比率で比較すると男子に比べて、女子学生の傷病発生率の方が高かった。学年別(図1)では3年生が502件、次に1年生427件、2年生340件と続き、4年生での発生件数は183件と低かった。特に、3年生の傷病数は全体の34%を占めていた。

次に学生個々の健康管理室への来室頻度を調べた(表2)。1回以上来室したことがある学生数は522名と全学生の約30%ほどで、そのうちの約

表1 男女別患者総数(体育学部)

	男性	女性	計
学生数	1214	203	1417
患者総数	1189	263	1452
発生率(%)	98	130	114

表2 同一学生による来室頻度

回数	1	2~5	6~10	11~15	21~25	16~21	26~30	合計
人数	283	194	29	11	3	0	2	522

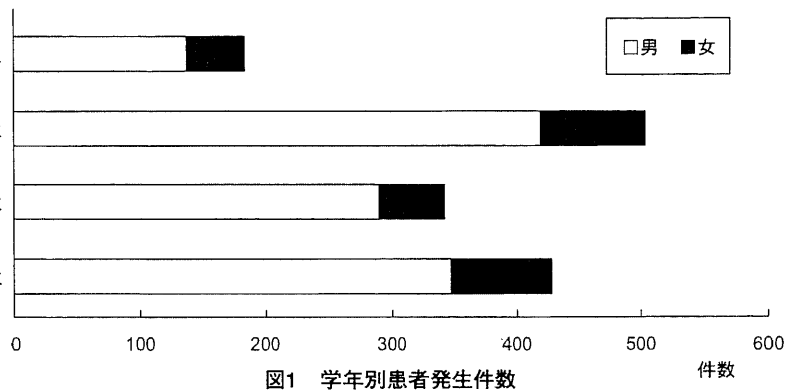
* 国士館大学体育学部体育生化学研究室

** 国士館大学体育学部

*** 国士館大学健康管理室

**** 国士館大学体育学部スポーツ医科学研究室

半数の学生は年間1回程度の利用にとどまっています。しかしその一方で、年間11回以上も来室している者が16名にものぼった。中には20回以上もおよんでいる学生も2名ほどいた。



(2) 月別・時間別の傷病発生状況

月別では6月と10月に患者数が集中している(図2)。続いて春期(4・5月)および秋～冬期(11月、12月)に多い。夏休みである8月は医務室が閉室のため利用者はない。時間別(図3)では10～11時と12～13時に来室する者が多かった。医務室の昼休み時間は12時50分から13時40分までなので14時になるとふたたび患者数が増大した。また、多くの実技授業は16時で終了しているので、16時以降の患者は主にクラブ活動中に発生したと考えられる。

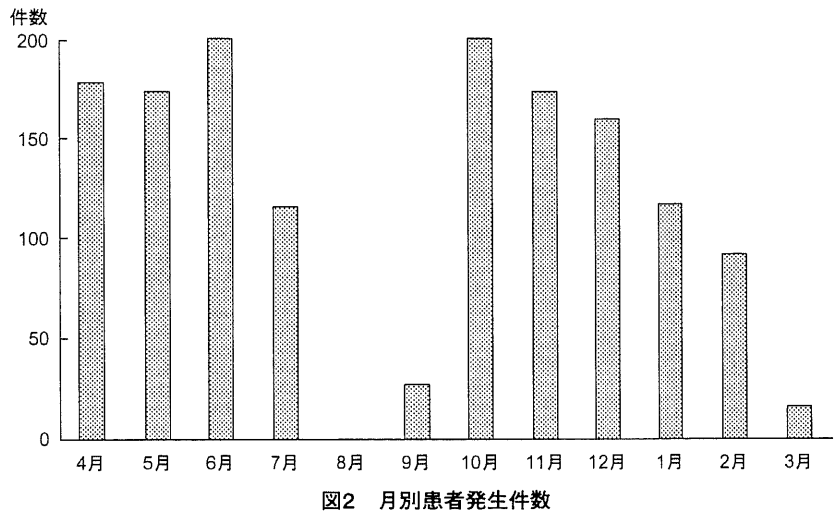


図2 月別患者発生件数

(3) 傷病の種類

発生した傷病を区別してみたのが図4である。外科・整形外科が796件と最も多く、続いて内科の504件の順で、この3科だけで全体の約90%となった。特に、外傷関連(外科・整形外科)は全体の55%にもなっ

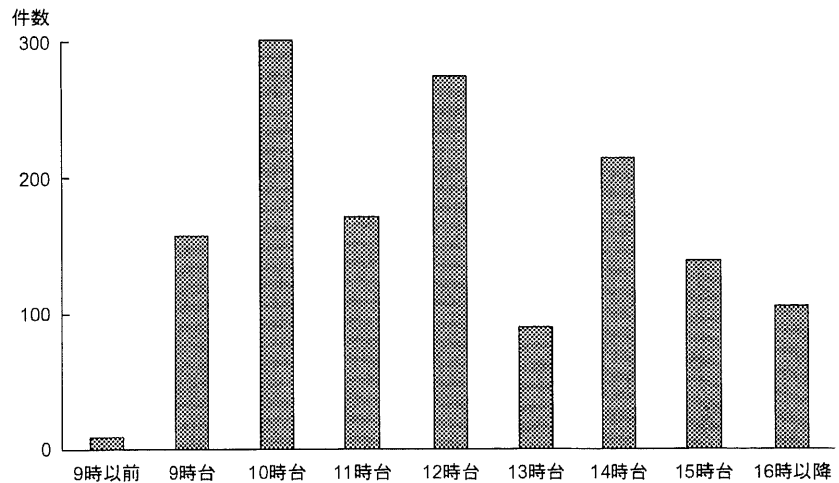


図3 時間別患者数

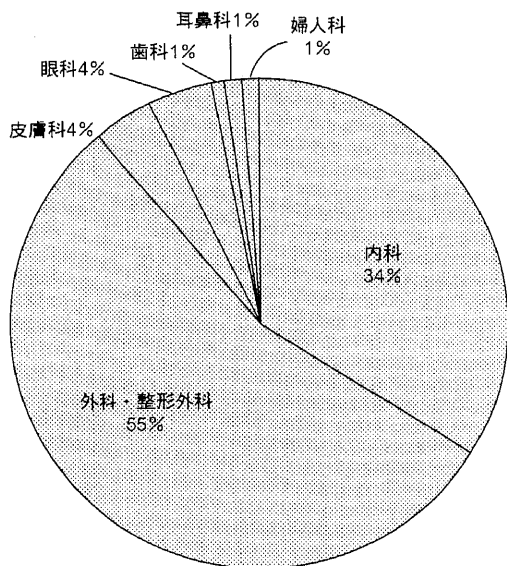


図4 診療科別発生率

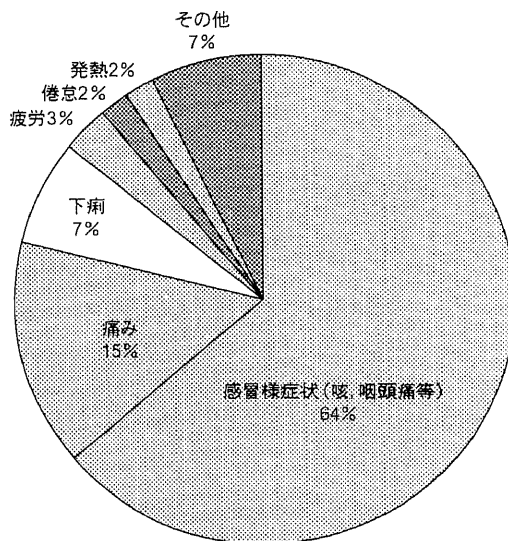


図5 症状別件数 (内科)

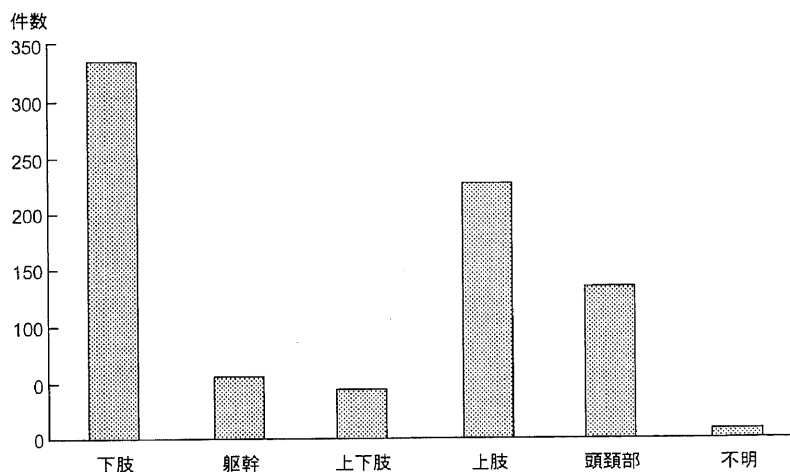


図6 傷害の部位別発生件数 (外科・整形外科系)

いて、処置が急務を要したケースが多かったことがうかがえる。

各科別の症状を調べてみると、まず内科では圧倒的に感冒様症状を訴える者(321件)が年間を通して多かった(図5)。次に、頭痛、腹痛などの痛み(75件)の症状によって来室する者が続いた。

外科・整形外科系の傷害部位別(図6)では下肢、上肢、頭頸部の順で発生箇所が多かった。

外科系疾患(図7 a)では下肢、上肢とも感染創(25%)、擦過傷(21%)が多く、続いて切り傷や裂傷を訴えた。頭頸部のほとんどは耳の血腫(12%)の吸引に来室した学生であった。

整形外科系症例(図7 b)のうち外傷が60%、

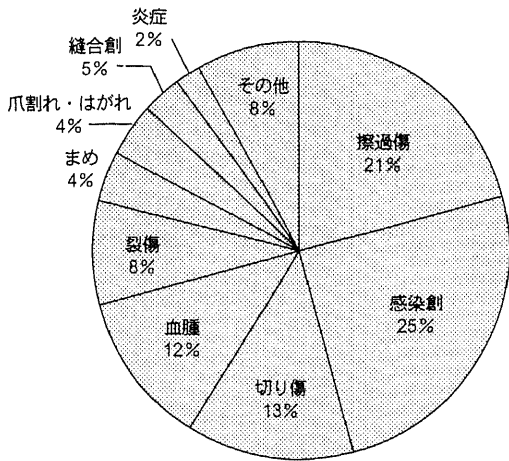


図7a 疾患別件数 (外科系)

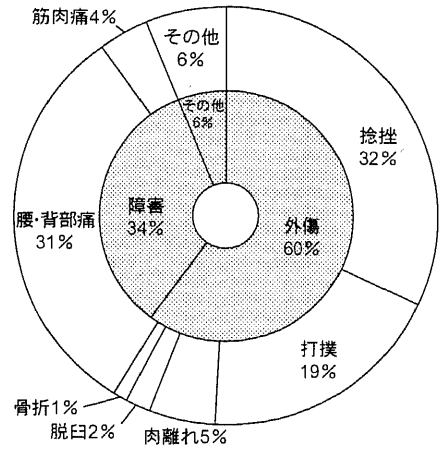


図7b 疾患別件数 (整形外科系)

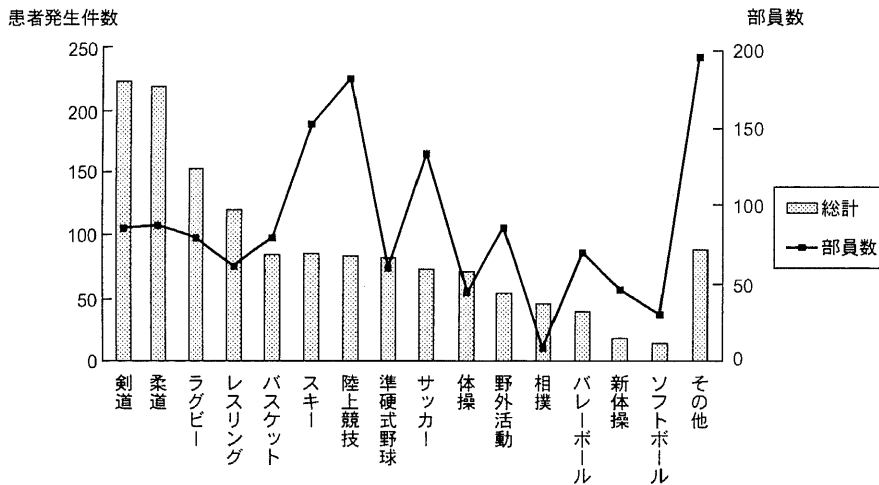


図8 クラブ別患者発生件数

障害が34%であった。外傷では捻挫、打撲の順に発生件数が多かった。さらに、重症と判定しうる肉離れ(16件)、骨折(4件)、脱臼(8件)といった症例もみられた。障害の多くは腰痛・背部痛や筋肉痛であった。

(4) クラブ別の傷病数

健康管理室を訪れる学生をクラブ別に分類したのが図8である。クラブ別では剣道部(223件)、

柔道部(217件)、ラグビー(153件)、レスリング(120件)の順で患者総数が多かった。これをクラブの部員数の比率から検討しても上記の4つのクラブの患者発生率はきわめて高かった。のべ件数は少ないが、発生頻度から検討すると上記クラブに加えて相撲(48件)、体操競技(73件)、準硬式野球部(83件)の各クラブが高い値を示した。列挙されたクラブの多くはコンタクトスポーツであ

ったり、競技自体に危険を特に伴う競技ばかりであるが、同様のコンタクトスポーツと考えられるサッカー部やハンドボール部では部員数に比して患者発生率が低かった。これは、外傷発生頻度の種目差によるものではなく、各クラブにおける外傷の初期治療の差による可能性も考えられる。

上位4クラブのうち剣道部では感冒様症状や腹痛といった内科的症状以外には下肢での感染創や擦過創、捻挫、膝の痛みを訴えた症例が多かった。さらに、他のクラブではあまり見られない疲労・倦怠感から健康管理室を訪れるものが多かったのも特徴的であった。柔道部やレスリング部は風邪以外に上下肢の感染創、捻挫、腰痛と耳介血腫が多かった。ラグビー部はやはり全身の感染創や切り傷や裂傷以外に肉離れや捻挫、痛みを訴えるケースが多かった。

考 察

平成6年度に健康管理室を訪れた本学部学生による患者総数は年間のべ1400名を越えている。本報告は健康管理室へ来室した学生のみを対象としているので、このデータから全体体育学部学生の傷病状態を推し量ることは難しい。軽度の傷でも処置を望む学生もいれば、かなり重傷でも来室しない学生もいるであろう。けれども来室した学生の50%近くが何らかの外傷を負い、応急処置を必要とした。

スポーツ活動には不確定要素が多く、予想しなかった事故が発生する可能性は極めて高い。来室者記録だけでは傷害発生の原因が、選手の体力やスキルによるものなのか、練習内容や指導法によるものなのかは判定できない。しかしながら、少しでも患者総数を減少させるためには学生自身が傷病に関する知識を学び、正しい処置法を見つけること、テーピング・防具の使用や筋力アップ・ストレッチング等の手段により傷害の軽減を図ることがあげられる。それと同時に、指導者が事故および傷病原因につながる諸問題を検討し、ひと

つひとつ解決策を講じていくことが重要である。特に各クラブでは指導者、コーチ、選手が互いに協力してメディカルチェックを基本とした健康管理体制を整えることが傷害の予防に繋がると考えられる。

最後に、健康管理室全体を総括してみると、平成6年度に多摩健康管理室の患者総数(教職員を含む)は2046名であった。校舎別で比較すると、世田谷校舎の患者総数は4493名、鶴川校舎は2125名であった。教職員ならびに学生数は多摩校舎に比べて世田谷校舎では約5倍、鶴川校舎でも2.5倍ほど多い。したがって多摩校舎での患者発生頻度がいかに多いかがわかる。多摩校舎のすぐ近くに薬局や適切な医療機関が少ないことも患者数増加の遠因の一つであろう。他校舎でのデータがないので詳しい比較はできないが、多摩校舎の方は前述のように患者の多くは本学部学生で占められ、その症状は傷害に対する緊急かつ適切な処置を要する場合が多かった。さらに、個々の症例では、熱中症や頭部外傷による意識消失やけいれんの発生などスポーツが原因となる重篤な障害も時折発生している。そのため重傷の場合、直ちに適切な治療を受けることができるように、学外の医療機関との連携体制を更に充実していくことも早急に考えるべき点であろう。今後、本学部教職員の協力による傷病の予防に努めるとともに全学的な協力による多摩校舎健康管理室の体制強化が望ましい。